

原 著

自己受容尺度短縮版 (SASSV) 作成の試み

板 津 裕 己*

BASIC STUDY OF SELF ACCEPTANCE SCALE SHORT VERSION (SASSV)

Hiromi ITATSU

This paper is basic study of Self Acceptance Scale Short Version (SASSV, 5 factors, 25 items).

Subjects are 1441 university and junior college students (Male 864, Female 577). 269 students (Male 128, Female 141) among them, are carrying out with Locus of Control Scale (LOC, Kamahara et al. 1982).

Concerning SASSV which is decreased in item number from SAS (Self Acceptance Scale, Itatsu 1986, 5 factors, 50 items and others), it is attempted to quantify subscale score balance (Profile Balance Quantity). And other, SASSV is examined to make sure its validity and reliability. Examination heads are following. 1, Correlation between SASSV and SAS: Test of reproduction. 2, Test between correlation SASSV and LOC, and SAS and LOC. 3, Factor structure. 4, Calculate reliability coefficient and MSA (Kaiser 1970), and the like. Those results bring SASSV has fundamental characteristics of SAS. Further, it is found that PBQ is effective. After this, it is necessary to continue examining the effect and the evaluation of PBQ precisely, and so is SASSV on the whole.

問 題

自己受容性 (self-acceptance) は、1940年代以降、主として臨床心理学の領域において注目され、心理療法の大きな柱の1つにかぞえられている概念である (Crown, D. P. & Stephens, M. W. 1961⁴⁾, 水島・土沼 1984, など)。今日、自己受容性の定義は必ずしも明確にされているとはいえないが、各研究者の自己受容性の定義・考え方を整理すると、「ありのままの自己を抑圧・歪曲なしに受け入れること」「是認とは異なる」「生き方・自己成長の意欲と関連する」「操作的には『現実自己』と『理想自己』との一致度であらわされる」などの指摘に共通性がみられる (Combs, A. W. & Snygg,

D. 1949³⁾, 国分 1979¹¹⁾, 梶田 1981⁹⁾, など)。

この自己受容性の問題は、心理学の立場から研究されるようになるはるか以前から、哲学・宗教といった人間存在を明らかにしようとする研究領域において重要視されていた。たとえば、聖書や仏典、莊子などに、自己受容的な態度・生き方が人々に望まれること、そして、それが人間本来の姿であるとの考え方・記述がみられる。Vits, P. C. (1985) は、今日の心理学的研究における自己受容性の考え方・概念は、神学者 Fosdick, H. E. の見解に基づくものが大であること、また、彼の考え方が、後年の Rogers らに影響を与えていると述べている。この指摘も、自己受容性の問題が心理学の領域を越えて考察されていたことを示すものである。

* 駒澤大学
Komazawa University

各人の自己受容の程度は、自己受容度としてあらわされる。この自己受容度を測定する方法は大きく以下のよう
に分類されている。

①「現実自己」と「理想自己」との差異に焦点をあてる方法

②チェック・リスト法

③自己評定法

④投影法

⑤クライアントの発言内容を分析・評定する方法

このうち、自己受容度を自己評定法によって測定しようとする研究の流れは、以下のようにまとめることができる。

まず、研究初期(1940～50年代頃)は、各研究者が、臨床経験から見いだした自己受容している人の内面的・行動的諸特徴を質問項目にして、質問項目得点の合計点を自己受容度にあてた (Sheerer, E. 1949⁷⁾, Phillips, E. L. 1951¹⁵⁾, など)。それらの尺度は、自己受容性の全体的把握を意図していたものと思われる。そして、近年では、急速なコンピュータの発達を背景の1つにして、自己受容性を構造的に分析する研究が行なわれるようになり、自己受容尺度にも下位尺度が設定されるようになった。ここでは、尺度合計点と共に、下位尺度得点が各人の自己受容度をとらえる手がかりになった (Bills, R. E. 1953¹⁾, 宮沢 1979¹²⁾, 沢崎・真仁田・小玉 1982¹⁸⁾, など)。これらの構造分析の研究は、自己受容性が単独因子 (1決定因子) から成るものではなく、諸概念の複合的構成体であることを明らかにした。このように、自己受容性が諸概念の複合的構成体であるならば、単に各構成概念 (下位尺度) を得点として量的にとらえるだけではなく、各構成概念 (下位尺度) 得点間のバランスにも注目していく必要がある。

筆者は、これまでに自己受容尺度の作成・改良を試み、その信頼性・妥当性の確認をおこなってきた (板津 1983³⁾, 1986⁹⁾, など)。本研究は、さきに筆者が作成した尺度 (板津 1986 : 5因子50項目の5段階自己評定法項目と5項目の記述項目で構成、以下50項目版と略す) から、①記述項目を削除する、②評定法質問項目を削減するとともに、下位尺度得点バランス値 (Profile Balance Quantity, 以下 PB 値と略す) を数量化することにより、自己受容得点と PB 値を評価観点にした、自己受容尺度短縮版 (以下 SASSV と略す) を作成しようとするものである。

方 法

研究目的

自己受容尺度短縮版 (SASSV) を作成する。さらに、下位尺度得点バランスを数量化することによって、自己受容得点と下位尺度得点バランス値から自己受容度をつかめるようにする。

研究方法

1. 被験者

関東地方の2大学・2短期大学の学生、男性864名、女性577名、合計1441名に50項目版を実施した。このうち、男性128名、女性141名には、並行して Locus of Control 尺度 (鎌原ら 1982¹⁰⁾) を施行した。

結 果

1. SASSV 作成の経過

A. 項目選択と SAS (50項目版) との再現性検討

まず、50項目版について、主成分分析法・直交バリマックス回転を実施し、5因子を抽出した。ここで、因子負荷量の下位基準を0.400とすると、この値を満たす項目数の最も少ない因子が、因子 V の5項目であったため、各因子の因子負荷量の上位から5項目ずつ合計25項目を候補項目とした。

この25項目について、各因子、因子負荷量の上位から1項目・2項目・3項目・4項目ずつから成る5項目版・10項目版・15項目版・20項目版、および25項目版について、50項目版の再現性 (相関関係) を検討した。その結果、25項目版が、尺度合計点および各下位尺度のいずれについても最も高い値を示したので、候補項目25項目すべてを SASSV に採用することにした。SASSV と50項目版との再現性を Table 1 に示す。

さらに、50項目版と LOC, SASSV と LOC の相関関係に有意差があるかについて検討した。その結果、Table 2 に示すよう相互間に有意差は認められなかった。

Table 1 SASSV の再現性係数 (SAS 得点との相関関係)

	全 体 (n=1441)	男 性 (n=864)	女 性 (n=577)
因子 I	0.934	0.931	0.937
因子 II	0.906	0.902	0.915
因子 III	0.889	0.887	0.891
因子 IV	0.872	0.883	0.887
因子 V	0.887	0.878	0.857
尺度合計点	0.962	0.962	0.961

Table 2 SASSV, SAS と LOC との相関関係

	SASSV	SAS	有意差
因子Ⅰ	0.487	0.513	n.s.
因子Ⅱ	0.437	0.470	n.s.
因子Ⅲ	0.179	0.225	n.s.
因子Ⅳ	0.323	0.379	n.s.
因子Ⅴ	0.404	0.447	n.s.
尺度合計点	0.553	0.564	n.s.

全体 n=269

B. 因子構造の確認

今回選ばれた25項目について、主成分分析法・直交バリマックス回転を実施して5因子を抽出したところ、Table 3のように、従来の因子構造を保持していることが確認できた。この5因子で全分散の48.97%を占めている。

今回、各因子の質問項目を削減したことにより、各因子の意味づけについて一部修正を行った。

因子Ⅰは、自分自身を成長・発展させていこうとする姿勢、目標をかかげて努力するような態度、自律性などを問う項目からなる。さらに、現在の自分自身に満足することなく、より充実した自己を実現しようとする積極性をも意味する。この因子は、生き方の因子と意味づける。

因子Ⅱは、自分ひとり社会から孤立しないで、他者との円滑な関わりを有することができるか、積極的に他者との関わりをもつ気持ちがあるのかを問うものであり、他者との関わりかたの因子と意味づける。

因子Ⅲは、落ち着きのなさ、対人関係場面などにおいて、感情的に不安定なさま、一時的に気の高ぶりやすいさまを意味する項目からなる。これらの項目はすべて逆転項目扱いであることから、情緒不安定でないことの因子と意味づける。

因子Ⅳは、自分自身を積極的に押し出すことができないさま、自分の意志よりも他者によって自己の行動が左右されるさま、自分自身に確信がもてないさまを意味する項目からなる。因子Ⅲと同様に、すべての項目が逆転項目扱いのため、自信・自己信頼に欠けていないことの因子とする。

因子Ⅴは、現在の自分自身に満足している（していない）、気持ちの落ち着いているさまを意味する項目からなり、自分自身への満足感の因子と意味づける。因子Ⅰが自己成長志向・動的な意味あいをもつものに対して、この因子の項目は、むしろ安定志向・静的な意味を有するが、それは、現在ある自分自身の姿を歪めることなく、

素直に見究められるか、自己客観視できるかを問うものと言える。さらに、この因子には諦念の感情が伴うことが考えられる。

以上、50項目版との再現性や SASSV の因子構造などの結果から、SASSV は、従来の50項目版 SAS の基本的傾向を保持していると言える。

C. SASSV 尺度合計点・下位尺度得点について

SASSV 尺度合計点および下位尺度得点は、Table 4の通りであった。性差間有意差は、因子Ⅰ・因子Ⅲ・因子Ⅳにみられ、因子Ⅰでは男性の方が、他の2因子では女性の方がより受容的であった。また、両性とも、因子Ⅱ：他者との関わり方において最も受容的であった。

D. 上位因子構造

さらに、上記5因子の上位因子構造をみるために、各因子合成得点について主成分分析・直交バリマックス回転を実施したところ、Table 5のように2因子が抽出できた。この2因子で、全分散の62.36%を占めている。

因子Aは、因子Ⅰ・因子Ⅱ・因子Ⅴが大きな負荷量をとる。これらの因子の意味づけ、およびそれら因子に含まれる質問項目は、行為・行動としてあらわされるものが多い。そこで、この因子Aは、自己の行為・行動への受容的態度と意味づける。

一方、因子Bは、因子Ⅲ・因子Ⅳにおいて大きな負荷量を示している。この方は、自分自身の内面的な気持ちの安定性を問うような因子および質問項目が多いので、自己の行動基盤となる内面的な安定感の因子とする。因子Ⅳ・因子Ⅴは双方の因子の中間に位置している。

この上位因子構造の構成概念が、社会・人のかかわり合いのなかにあらわれる自己の行為・行動に対しての受容的態度と、それを支える自己の内面的な安定感とに大別できることを意味する。このように自己受容性は、単に自己の行為・行動を受容的にとらえるだけではなく、現在の自分自身を歪曲することなく素直に見つめたうえで、自分自身を受け入れる態度であることから、肯定的自己評価や承認と区別されるものと考えられる。Rogers, C. R. (1949¹⁰⁾) は、「自己受容は、自己に対する肯定的な態度である」と定義している。しかしながら、彼は、受容されているか否かの程度を問題にするのではなく、受容としてのありのままの特徴を受け入れる態度・構えを中心においている。それ故に、Rogers が考えている自己受容も、前述した自己を歪曲せずに受け入れる態度を意味するものと言える。そして、本来の意味での自己受容の程度の測定が困難であるために、Rogers のいう態度・構えが、肯定的な意見の増大にともなって示されることから、指標としての自己受容、自己

Table 3 SASSV 質問項目の因子負荷量

因子	質 問 項 目	因 子 負 荷 量					h ²
		I	II	III	IV	V	
I	11 私は何事にも努力をおこたらない(6)	0.659	0.107	0.162	-0.178	0.152	0.526
	16 私は絶えず新しい経験を取り入れて自己の成長と発展を図る(17)	0.645	0.217	-0.105	0.079	0.064	0.484
	21 私は具体的目標をかかげて実行してみようとする(21)	0.699	0.132	-0.005	-0.034	0.012	0.508
	36 私は物事を自分の意志で決定できる(1)	0.605	0.061	0.016	0.399	0.161	0.555
	46 私はたとえ失敗しようとも直面する問題に立ち向かう(13)	0.682	0.150	-0.013	0.096	0.126	0.513
II	7 私は他人を信頼できる(22)	0.019	0.649	0.057	-0.037	0.206	0.486
	12 私は社会との関わりあいを失わない(11)	0.389	0.522	0.066	0.092	0.068	0.526
	22 私は現在の友人関係に満足している(2)	0.121	0.517	0.040	0.036	0.330	0.508
	32 私は社交的である(8)	0.289	0.655	-0.147	0.322	0.083	0.645
	37 私は人との付き合いがよい(18)	0.227	0.742	-0.006	0.185	0.117	0.650
III	3 私は感情的になりやすい(19)*	0.051	-0.083	0.680	0.127	0.020	0.489
	8 私は衝動的になりやすい(14)*	0.086	-0.080	0.673	0.204	-0.104	0.519
	18 私は落ち着きがない(7)*	0.198	-0.086	0.587	0.028	0.087	0.400
	33 私は他人の行為にすぐに批判的になる(3)*	-0.147	0.278	0.588	-0.038	0.156	0.471
	38 私は人をおさえようとする傾向が強い(23)*	-0.168	0.122	0.625	-0.130	0.057	0.453
IV	4 私は他人の意見に左右されやすい(12)*	0.376	-0.171	0.248	0.545	0.097	0.539
	9 私は過度に遠慮がちである(24)*	0.034	0.177	-0.080	0.710	-0.023	0.544
	14 私は必要以上に反省する傾向がある(4)*	-0.237	0.008	0.178	0.585	0.120	0.444
	29 私は自分が正しいと思ったことでもなかなか主張出来ない(9)*	0.235	0.145	-0.035	0.665	0.071	0.524
	39 私は神経過敏である(15)*	-0.256	0.239	0.342	0.433	0.154	0.451
V	5 私は自分が好きである(5)*	0.248	0.104	-0.087	0.100	0.651	0.514
	10 私は現在の自分に満足している(10)	0.156	0.161	0.011	0.034	0.732	0.587
	25 私は自己の体質改善をしたい(20)*	0.022	-0.031	0.151	0.315	0.502	0.375
	45 私は現在の親子関係に満足している(16)	-0.020	0.160	0.005	-0.048	0.554	0.335
	50 私の心はくつろいだゆったりとした状態にある(25)	0.072	0.242	0.254	0.074	0.535	0.420
V P		2.981	2.416	2.378	2.317	2.150	12.242
寄 与 率 (%)		11.92	9.66	9.51	9.27	8.60	48.97
相 対 寄 与 率 (%)		24.35	19.74	19.42	18.93	17.56	100.00

()は SASSV 新項目番号をあらわす

* は逆転項目をあらわす

受容度は自己に対する肯定的な態度におきかえられたのであろう。

2. PB 値について

PB 値を算出するに先だって、SASSY 合計点と下位尺度得点の回帰式で求めた。その結果が Table 6 である。PB 値は、回帰式から求める下位尺度期待得点(期待値)と実際の得点(実際値)のズレの総和とし、次の

式で求める。

$$PB \text{ 値} = \sum \frac{(\text{実際値} - \text{期待値})^2}{\text{期待値}}$$

下位尺度得点ごとおよび尺度全体での PB 値は Table 7 の通りであった。PB 値は正規分布しないので、よく用いられる近似法として、PB 値の平方根変換値を付加する。いずれの対においても性差間に有意差は認め

Table 4 SASSV 尺度合計点・下位尺度得点

	全 体 (n=1441)		男 性 (n=864)		女 性 (n=577)		性差間 有意差
	平均点	標準偏差	平均点	標準偏差	平均点	標準偏差	
因子Ⅰ	15.63 (3.13)	3.73	15.90 (3.18)	3.68	15.28 (3.05)	3.79	***
因子Ⅱ	16.52 (3.30)	3.81	16.42 (3.28)	3.80	16.69 (3.34)	3.83	n.s.
因子Ⅲ	16.04 (3.21)	3.52	15.78 (3.16)	3.58	16.44 (3.29)	3.40	***
因子Ⅳ	15.54 (3.11)	3.54	15.24 (3.05)	3.54	1.975 (3.19)	3.51	***
因子Ⅴ	14.68 (2.94)	3.81	14.68 (2.94)	3.74	14.70 (2.94)	3.93	n.s.
尺度合計点	78.42 (3.14)	11.68	78.02 (3.12)	11.64	79.03 (3.16)	11.72	n.s.

() は 1 項目あたりの平均点をあらわす

*** は危険率 0.1 % 水準で有意差があることをあらわす

Table 5 SASSV 上位因子構造

	因子負荷量		h ²
	A 因子	B 因子	
因子Ⅰ：生き方	0.781	-0.053	0.613
因子Ⅱ：他者との関わり方	0.824	0.104	0.690
因子Ⅲ：情緒不安定でないこと	-0.093	0.865	0.757
因子Ⅳ：自信・自己信頼に欠けていないこと	0.325	0.652	0.549
因子Ⅴ：自分自身への満足感	0.650	0.361	0.553
V	1.826	1.317	3.143
寄 与 率 (%)	36.52	26.35	62.87
相 対 寄 与 率 (%)	58.09	41.91	100.00

A 因子：自己の行為・行動への受容的態度

B 因子：自己の行動基盤となる内面的な安定感

Table 6 SASSV 回帰係数 (尺度合計点からの下位因子得点予測式)

	回 帰 式
因子Ⅰ	$-0.170 + 0.201X_T$
因子Ⅱ	$-0.185 + 0.234X_T$
因子Ⅲ	$4.953 \pm 0.141X_T$
因子Ⅳ	$0.692 + 0.189X_T$
因子Ⅴ	$-3.625 + 0.233X_T$

 X_T は SASSV 合計点をあらわす $n=1441$

られなかった。

Table 8 は、SASSV 合計点・下位尺度得点と PB 値

女性で負の相関関係を示したものである。ここでは尺度合計や因子Ⅱと PB 値間に弱いながらも負の相関があることが認められた。これらの結果は、下位尺度得点間のばらつきが大きくなるにつれて自己受容性が低くなること、特に他者との関わり方や現在の自分自身への満足感といった側面での受容感が弱まることをあらわしている。

さらに、SASSV 尺度合計点と PB 値をそれぞれ 5 段階評価で 5 分割し、LOC 得点との関係について分散分析をおこなったところ、尺度合計点・PB 値各変動要因とともに両変動要因の交互作用においても有意な関係があることが認められた ($F=3.58$, $df=16$, $p<.05$)。

このように、PB 値は、PB 値単独でも、SASSV

Table 7 SASSV・PB 値 (回帰式より求めた理論値と実測値のずれ)

	全 体 (n=1441)		男 性 (n=864)		女 性 (n=577)		性差間 有意差
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
因子 I P B 値	0.555	0.857	0.546	0.858	0.568	0.856	n.s.
因子 II P B 値	0.553	0.831	0.566	0.844	0.534	0.811	n.s.
因子 III P B 値	0.616	0.899	0.627	0.892	0.599	0.909	n.s.
因子 IV P B 値	0.503	0.680	0.499	0.658	0.519	0.713	n.s.
因子 V P B 値	0.500	0.743	0.495	0.732	0.560	0.760	n.s.
合計点 P B 値	2.727	2.192	2.733	2.151	2.726	2.256	n.s.
合計点 P B 値(✓)	1.651	0.603	1.653	0.593	1.651	0.620	n.s.

Table 8 SASSV 尺度合計点・下位尺度得点と PB 値との相関関係

	全 体 (n=1441)		男 性 (n=864)		女 性 (n=577)	
	P B 値	P B 値(✓)	P B 値	P B 値(✓)	P B 値	P B 値(✓)
因子 I	-0.073	-0.079	-0.015	-0.009	-0.154	-0.178*
因子 II	-0.312 ⁺	-0.322 ⁺	-0.294**	-0.300**	-0.338 ⁺	-0.353 ⁺
因子 III	-0.061	-0.064	-0.319	-0.133	0.056	0.043
因子 IV	-0.063	-0.077	-0.094	-0.109	-0.260	-0.030
因子 V	-0.175*	-0.182*	-0.113	-0.129	-0.260**	-0.253**
尺度合計点	-0.220**	-0.232**	-0.208*	-0.216*	-0.237**	-0.254**

* 危険率 5 % 水準にて有意な相関があることをあらわす

** 危険率 1 % 水準にて有意な相関があることをあらわす

+ 危険率 0.1 % 水準にて有意な相関があることをあらわす

尺度得点との交互作用要因としても、指標としての有効性が確認されたが、その一方で、以上のような問題点が指摘できる。

①PB 値は、下位尺度ごとの理論値と実際値のズレの総和であり、PB 値だけではどの下位尺度でズレが生じているのか、どのようなズレであるかがわからない。

②特定の下位尺度得点で大きなズレが生じる人と、下位尺度得点ごとに小さいズレが生じる人の PB 値に差がない場合がある。

③「ときどきあてはまる」ばかりに○をした人の PB 値がちいさくなる。

これらの問題点に対処するにあたり、つねに尺度得点や下位尺度得点、下位尺度ごとの PB 値、得点プロフィール型などを参照して、経験的に PB 値の質的側面を検討する必要がある。このような問題点も有する PB 値は、単独で用いるよりも、自己受容性を理解するうえでの補助的情報として位置づけることが適切であろう。

3. 尺度の信頼性について

SASSV の信頼性は Table 9 の通りであった。Kaiser, H. F. (1970⁹⁾) の MSA (Measure of Sampling

Table 9 SASSV 信頼性係数

	全 体 (n=1441)	男 性 (n=864)	女 性 (n=577)
MSA			
尺度合計点	0.901	0.886	0.871
因子 I	0.942	0.929	0.926
因子 II	0.913	0.895	0.904
因子 III	0.854	0.832	0.815
因子 IV	0.884	0.886	0.833
因子 V	0.910	0.888	0.875
折半法による 信頼性係数	0.807	0.799	0.828

Adequacy) では、尺度合計点、下位尺度ごとのいずれにおいても高い値が得られた。

総括と今後の課題

尺度得点および LOC との相関係数を視点においた旧尺度 (50項目版 SAS) との再現性の検討、さらに、短縮版が従来の因子構造を保持していることから、今回作成

した自己受容尺度短縮版は、旧尺度の基本的傾向を充分に保持していると言える。

今回、新たに試みた PB 値についても、指標としての有効性を示唆する結果が得られた。しかしながら、今後とも、PB 値の有効性を検討すること、さらに、尺度全体としての評価基準を明確にしていく必要がある。

従来、自己受容性と社会適応性や他者受容性との関係については、相互に正の相関関係があることが報告されている。しかしながら、それらの関係間には限界があることも指摘されている (Sheerer 1949¹⁷⁾, Block, J. & Thomas, H. 1955²⁾, 戸荊 1961¹⁹⁾, など)。このような結果が導き出されたことについて、従来の研究は、自己受容性の程度を尺度得点のみに求めていたために、相互概念間の関係を説明する限界が生じたのではないかということが考えられる。

前述したように、PB 値には問題点も指摘できる。しかしながら、本研究において、PB 値が対人行動を基礎づける他者との関わり方や自己の統制の位置との間に弱いながらも負の相関関係を示すことが認められた。今後、この PB 値の指標としての有効性がより一層明確になれば、自己受容尺度得点と PB 値を組み合わせた自己受容性評価をおこなうことによって、自己受容性と社会適応性や他者受容性との関係がより明確にされていくのではないかという期待がもたれる。

文 献

- 1) Bills, R. E.: A validation of change in scores on the Index of Adjustment and Values as measurement of change in emotionality. *Journal of Consulting Psychology*, 1953, **17**, 135-138.
- 2) Block, J. & Thomas, H.: Is satisfaction with self a measure of adjustment? *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 1955, **51**, 254-259.
- 3) Combs, A. W. & Snygg, D.: *Individual Behavior*. Harper, 1949.
- 4) Crowne, D. P. & Stephens, M. W.: Self-acceptance and self-evaluative behavior; A critique of methodology *Psychological Bulletin*, 1961, **58**, 104-121.
- 5) 板津裕己: 自己受容性の研究, 日本応用心理学

- 会第50回大会発表論文集, 1983, 37.
- 6) 板津裕己: 自己受容性の研究 (3), 日本応用心理学会第53回大会発表論文集, 1986, 129.
- 7) Kaiser, H. F.: Some empirical results with Guttman's stronger lower bound for the number of common factors. *Educational and Psychological Measurement*, 1973, **33**, 99-102.
- 8) Kaiser, H. F. & Rice, J.: Little Jiffy Mark IV. *Educational and Psychological Measurement*, 1974, **34**, 111-117.
- 9) 梶田徹一: 自己意識の心理学, 東京大学出版会, 1981.
- 10) 鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治: Locus of Control 尺度の作成と信頼性・妥当性の検討, 教育心理学研究, 1982, **30**(4), 302-307.
- 11) 国分康孝: 心とこころのふれあうとき カウンセリング技法をこえて, 黎明書房, 1979.
- 12) 宮沢秀次: 青年期における自己受容性の一研究, 名古屋大学教育学部教育心理学科紀要, 1979, **25**, 105-117.
- 13) 水島恵一: 精神衛生と人間実存 —カウンセラーの断想—, 誠信書房, 1969.
- 14) 中村昭之・板津裕己: 自己受容性の研究—文献的研究と文献目録—, 駒澤社会学研究, 1988, **20**, 131-172.
- 15) Phillips, E. L.: Attitudes toward self and others. *Journal of Consulting Psychology*, 1951, **15**, 79-81.
- 16) Rogers, C. R.: The attitude and orientation of the counselor in clientcentered therapy. *Journal of Consulting Psychology*, 1949, **15**, 82-94.
- 17) Sheerer, E.: An analysis of the relationship between acceptance of and respect for self and acceptance of and respect for others in the counseling cases. *Journal of Consulting Psychology*, **13**, 233-238.
- 18) 沢崎達夫・真仁田昭・小玉正博: 青年期における自己認知と自己受容に関する研究 (3) —自己受容と性格・父母の養育態度等との関係について—, 教育相談研究, 1982, **20**, 59-73.
- 19) 戸荊正人: パーソナリティの適応の指標について—自己受容の測度の検討—, 愛媛大学紀要 (教育科学), 1961, **19**, 25-34.
- 20) Vitz, P. C.: *Psychology as Religion. The Cult of Self-Worship*. Eerdmans Publishing Co., 1977.